

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19510245
 研究課題名（和文）華南地域社会の歴史的淵源と現在
 研究課題名（英文）The On-going Integration of Southern China Regional Community with Special Reference to Its Historical Background
 研究代表者
 谷垣 真理子(TANIGAKI MARIKO)
 東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
 研究者番号：50227211

研究成果の概要：

本プロジェクトは日本における華南研究の活性化を目指した。本プロジェクトは現地調査を大きな柱とし、2年間の調査を通じて予想以上に珠江デルタ地区と香港・マカオとの一体化が進んでいることを確認した。香港・マカオに視座をすえることで、定点観測的に地域の動態を見通せた。研究成果は後述の論文や図書のほか、独自に作成した成果報告書（出版に向けて準備中）に結実している。プロジェクトの最後に中国廈門大学との研究協力関係を構築し、2009年度からの新プロジェクトへの基礎固めをした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：華南、香港、地域統合、台湾、客家、日本、華南経済圏、華人

1. 研究開始当初の背景

中国の経済発展著しい中で、現代中国に関する研究は質的にも量的にも拡充の傾向を続けている。研究は現状に影響され、上海の地方史的研究や上海を中心とする経済分析などが続々と現れている。しかし、中国全体の見渡した際、上海と同様に重要なのが華南地域である。戦前の日本の中国への勢力浸透経路は今なお、日本における中国認識に影響しており、中国の南部すなわち華南地方についての研究は上海研究ほどの盛り上がりを見せていない。

むろん、過去 20 年の間に、台湾や香港、マカオについての研究はそれ相当の蓄積を示している。香港返還前の華南経済圏についての論考をのぞけば、台湾研究者は台湾について論じ、香港研究者は香港を論じるという状況で、台湾と香港を同時に視野にいれるという研究関心は少なかったように思われる。

ところが、華南地域はこうした行政的な枠組みを越えた人・モノ・金の交流が急速に拡大している。その契機となったのは、1985年のプラザ合意であり、さらには 1990 年代半ば以降の中国大陆投資過熱、2000 年に入って

の香港・マカオへの中国大陸からのビザなし渡航の段階的解禁であった。このため、華南地域では交流の急増を背景に、経済だけではなく社会状況、広い意味での政治制度にいたるまで華南地域における認識の共有が図られている。

歴史的に見て、華南は外部世界との接触にさらされた中国世界の最前線であった。現在も、1997年に返還された香港と、1999年に返還されたマカオという中国世界の異分子を内部に抱えている。事実上の独立状態にある台湾も華南に位置する。これらの異分子と中国世界との相互作用を考えると、それぞれの地域の政治発展や民主化が中国世界に与える影響は予想以上に大きい。

2. 研究の目的

本プロジェクトでは華南地域社会の一大センターである香港・マカオに視座をすえ、香港・マカオと華南地域との一体化のプロセス、および香港・マカオと華南地域の一体化の具体的な事例について明らかにすることを目指した。

本プロジェクトは華南地域を単体的な単純和ではなく、地域的な文脈のなかで有機的にとらえようとした点に特徴がある。このため、本プロジェクトでは香港・マカオだけでなく、台湾を視野に入れることで、中国大陸でのみ完結する華南地域論ではなく、海峡を跨ぎ、さらには日本にも延伸していく可能性を有する華南社会論を提起することを視野に入れた。

また、華南地域社会がいかにして一体化しつつあるのか、一体化の例証として何が華南地域社会をつなぐ要素かを考察する際、本プロジェクトは現状にのみ関心を持つのではなく、その歴史的淵源をさぐることをつよく意識した。現在、状況は急速に変化しており、その時点での状況が固定化されるのか、あるいは反作用のもとまた別の変化をとげるのか、即断できない。その際、それぞれの社会の歴史的淵源を意識し、歴史的な文脈のなかで検討することは重要である。

3. 研究の方法

本プロジェクトは現地調査を中心とするプロジェクトであった。本プロジェクトの合同現地調査や研究会活動を通して参加者は活発に意見交換し、日本において華南研究を活性化させることを目指した。

参加者はこれまで、各自の問題意識に沿って、さまざまな論稿を発表してきた。谷垣真理子は香港の政治と社会、塩出浩和はマカオ

の歴史と政治、容應英は留学生を中心とする日中関係史と香港返還問題、林少陽は日中比較文学研究と清末民初における文語文の消滅、飯島典子（研究協力者）は客家社会の成立についての研究蓄積がある。

(1) 2007年度

2007年度は香港・広州・マカオについて、これまでの研究蓄積を整理し、本研究プロジェクトのコアとなる議論を打ち立てるべく討論を重ねた。研究会は2007年6月2日と2007年7月7日、2008年3月29日に実施した。最初の研究集会では、現地調査の打ち合わせを行い、事前の情報共有を行った。

最大の研究活動は夏の現地調査であった。2007年9月12日（水）～9月20日（木）にかけて、メンバー全員参加を原則として、香港からマカオに入り、珠海・中山を経て珠江デルタの西側を見学し、その後広州から惠州・河源という珠江デルタの東側を訪問し、珠江デルタの全体像を把握しようとした。

参加メンバーは専門に応じて担当を決め、ほかのメンバーのために当該地域の現地調査を手配した。この調査では、予想以上に珠江デルタ地区と香港・マカオとの一体化が進んでいることがわかった。

また、現地調査時に、中山大学の毛艶華教授（珠江デルタ地区の経済が専門）と香港天地図書会社の孫立川氏との意見交換からきわめて多くの学問上の刺激を受けた。特に、毛教授は2008年春に来日し、講演会を開催し、日本の他の華南研究者とも交流を深めることができた。

(2) 2008年度

2008年度、研究会は2008年5月10日、2008年7月12日、2008年12月22日、2009年3月27日に実施した。2007年度と同様に、現地調査前に事前打ち合わせを行った。このほか、プロジェクトメンバーがカバーしきれない日本との関係について、和仁廉夫氏（香港軍政史研究家）と日野みどり氏（金城学院大学）を講師として招き、軍政期の香港についての研究会を開催し、台湾を媒介とした華南地域と日本との関係性を確認した。

2008年度は各人の研究関心に沿って現地調査を行った。谷垣は香港・深圳、容は香港・深圳・江門、林は香港・深圳・廈門、塩出は米国サンフランシスコ、飯島は北京と台湾で現地調査を行った。

また、2007年度の経験から、海外の研究機関との研究協力関係の構築を実感し、当初予定していなかった海外招聘活動を行った。

許淑真・摂南大学名誉教授の仲介によって、

2009年3月に廈門大学の南洋研究院から莊国土院長と廖大珂教授の2名を招聘することができた。両氏は中国における華僑華人研究の現状と最前線の研究を紹介、今後の研究協力の可能性について意見交換ができた。

4. 研究成果

本プロジェクトは現地調査を大きな柱とし、2年間の調査を通じて予想以上に珠江デルタ地区と香港・マカオとの一体化が進んでいることを確認した。香港・マカオに視座をずえることで、定点観測的に、地域の動態を見通すことができた。

研究成果は直接的には「5. 研究業績」にある10点の論文、3点の図書、1点の学会発表であろう。また、本プロジェクトの研究成果は独自に作成した2部の報告書に結実している。2007年度終了時に現地調査レポートを中心に34ページの間中成果報告書を作成した。2007年度の活動の経験から、2008年度は研究活動をさらに活発化させ、終了時には150ページ強の成果報告書を完成した。

この中には2回の講演会、2回の研究会の概要と報告資料のほかに、「香港と中国内地との一体化」(谷垣)、「特律するマカオ」(塩出)、「日本・香港コンテンツ産業協力の可能性」(容)、「香港・上海・東京を結ぶ文化人コミュニティー」(林)、「鉞山開発に見る客家ネットワーク」(飯島)など、プロジェクトメンバー各人が2万字前後の論稿をおさめた。

2年の間に、本プロジェクトは国内で学問的発信を続けた。この間、副代表の塩出は日本広東研究会の幹事として、必要に応じて、本プロジェクトの研究会を広東研究会との共催とした。2008年度からは、研究代表の谷垣が日本華僑華人学会の企画委員会委員長に就任し、テーマに応じて華僑華人学会との共催の形をとった。研究会を各団体との共催という形式をとることで、より多くの参加者を集め、本プロジェクトの広い意味での広報活動を行った。

本プロジェクトの海外への発信は、中山大学と廈門大学との研究協力関係構築の努力である。特に2009年3月末の廈門大学からの2名の研究者招聘時には、今後の研究協力のありかたについても意見交換することに成功した。莊国土南洋研究院長は中国における華僑華人研究を過去20年間牽引した人物であり、誇張ではなく中国における華僑華人研究の最前線にいる。莊氏からは「従来商業ネットワークについての研究は多いが、さまざまなディシプリンの研究者が参集した研

究プロジェクトは案外少ない。新たな研究のビジョンを持っており、今後の研究の発展が期待できる」という評価を得た。

プロジェクトの最後に中国廈門大学との研究協力関係の構築に成功し、2009年度からの新プロジェクトへの基礎固めをすることができた。

2009年度より、本プロジェクトの発展プロジェクトとして「基盤研究(B)北東アジアから東南アジアをつなぐ華人ネットワークについての研究」がスタートした。新プロジェクトでは、従来東南アジアや北米とのネットワークが重視されてきた華南の華人ネットワークを北東アジアとのネットワークの存在を視野に入れることで再検討するものである。メンバーには東南アジア研究者のほか、ロシア研究者、北海道華僑研究者を含み、より幅の広い視野から華南地域を検討しようとしている。

なお、2009年4月号から『東亜』に本プロジェクトメンバーによる「多面的華南世界」というエッセイの連載が始まった。2冊の成果報告書とともに単行刊としての出版に向けて、今後議論を積み重ねていく予定である。

本プロジェクトは日本における華南研究の活性化を目指した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

谷垣真理子、管理された民主化 普通選挙導入をめぐる香港の事例、東洋文化研究所紀要(東京大学)第155冊、292-324、2009年、査読なし

容應葵、日本・香港のコンテンツ産業パートナーシップによる対中進出 C E P Aの活用および知財権保護、アジア研究所・アジア研究シリーズ、No.67、73-94、2009年、査読なし

容應葵、中国人と日本人 過去・現在・未来、A I B Sジャーナル(アジア・国際経営戦略学会)No.2、16-19、2009年、査読なし

林少陽、黄侃の「文」解釈と章炳麟及び劉師培との関連 黄侃の『文心彫龍札記』をめぐる、九葉詩話会(駒澤大学)第4号、54-81、2009年、査読なし

林少陽、漢字文化圏文脈のモダニズム文

学 近代修辞批判系譜の中の横光利一の批評理論について、比較文学研究、第92号、47-64、2008年、査読あり

林少陽、現代思想としての西脇理論 そのロマン主義とヘーゲル主義批判をめぐって、日本思想史研究、第9号、74-100、2008年、査読なし

谷垣真理子、第1編 政治 第10章 香港・マカオ、中国総覧、2007年～2008年版、78-82、2008年、査読あり

塩出浩和、マカオ民主派議員のマカオ観 吳国昌氏の「語り」に見るマカオと中国、中国文化研究センター（城西国際大学）第4号、107-111、2008年、査読なし

林少陽、章炳麟の「音」から歌謡徴集運動の「音」へ 白話文運動を捉えなおす、九葉詩読会（駒澤大学）第3号、1-25、2008年、査読なし

谷垣真理子、返還10年の香港政治 香港経験越境の可能性、問題と研究（台湾国立政治大学国際関係研究センター）第36巻第4号、1-22、2007年、査読なし

〔学会発表〕(計 1件)

塩出浩和、広東珠海と上海虹橋における女性若年労働者の質的研究、日本広東研究会、2008年12月20日、東京外国語大学

〔図書〕(計 3件)

容應英、異郷に育つ 19世紀米国の日本人・中国人留学生、貴志俊彦・谷垣真理子・深町英夫（編）模索する近代日中関係 対話と競存の時代、東京大学出版会、2009年（刊行予定）

塩出浩和、中国政治の中長期展望、中国ビジネス事情、学文社、2008年、総198（内50-74）

塩出浩和、香港における戦勝と解放、川島真（編）資料で読む世界の八月十五日、2008年、山川出版社、総230（内181-192）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

日本広東研究会 Web ページ

http://homepage2.nifty.com/hirokazushio/sakusaku/4_1.htm

<http://hirokazushiode.cocolog-nifty.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷垣 真理子 (TANIGAKI MARIKO)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：50227211

(2) 研究分担者

塩出 浩和 (SHIODE HIROKAZU)
城西国際大学・留学生別科・助教
研究者番号：60235497

容 應英 (YOU OUYU : YUNG YINGYUE)
亜細亜大学・経営学部・教授
研究者番号：2023849

林 少陽 (RIN SYOUYOU : LIN SHAOYANG)
東京大学・教養学部・准教授
研究者番号：20376578

(3) 連携研究者

なし

そのほか 研究協力者 1名

飯島 典子 (IIJIMA NORIKO)
和洋女子大学・国際関係学部・非常勤講師